

名著『字源』の著者・ 簡野道明の若き日の 足跡を訪ねて



簡野道明の経歴

かんの・みちあき(どうめい)
(慶応元年～昭和13年
1865～1938)

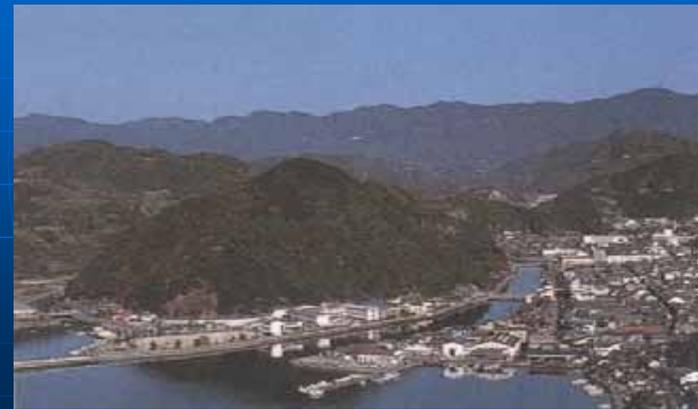


伊予吉田藩士・
簡野義任(よしとう)の
長男
江戸・八丁堀の伊達
家の長屋に生まる

伊予吉田藩の場所(3万石)



伊予吉田藩(宇和島市吉田町)



吉田町マップ



簡野道明の業績

- 漢和辞典『字源』(大正12年刊 1923)
- 多くの漢文教科書を編集(85種類)
- 注釈書(21種類)
- 『古文真宝粹』『文章軌範』『補注論語集註』『補注孟子集註』など
- 東京大学・立命館大学・愛媛大学・國學院大學・上智大学・佐賀大学・専修大学・跡見学園女子大学など

簡野道明の本



- 郷里の宇和島市吉田町「簡野道明記念 吉田町図書館」所蔵
- 旧蔵書はすべてここに

ガラスケースの中の著書



道明のたくさんの著書



日本最初の漢和辞典は？

- 明治36年(1903)2月
- 三省堂「漢和大字典」がそのスタート。
- 貴族院議員・文学博士の重野安繹、東宮侍講・文学博士の三島毅、北京大学堂教習・文学博士の服部宇之吉ら三者の監修。
- 語彙の配列は、**画数順**。
- 語彙の選択もやや難。

■ 旧満鉄所蔵・大連図書館で、

- 三省堂「漢和大字典」(明治36年)
- 簡野道明「字源」(大正12年)

この二つの漢和辞典を引き比べてみよう。……

修復後の大連図書館

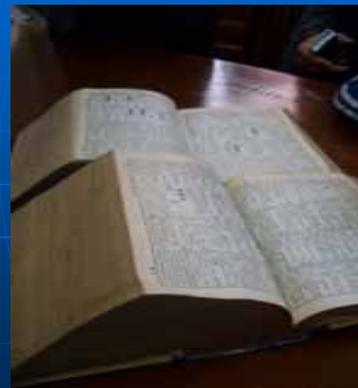


旧満鉄・大連図書館の『字源』



- 場所:大連図書館・魯迅路別館
- どんな違いがあるのだろうか?

満鉄で「字源」を引く



- 2006.
10.21
調査

その結果は、...

字源



- 掲載語彙の意味が正確
- 出典も確認できる
- 音訓語彙索引の工夫
- 語彙の配列が五十音(従来は画数順)

『字源』は、

《次元》

が違う

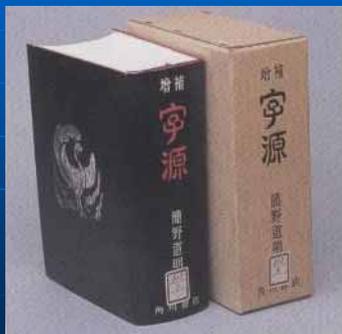
漢和辞典史の話



当時、なぜこれほど漢学が盛んだったの？

- 大連で考えてみる『坂の上の雲』
- 日清戦争後、国内世論が変化
- 東アジアの盟主という自覚
- 西洋文明に伍する意図

現在の「字源」



- 明治書院
- 角川書店刊(昭和51年)
- 名古屋大学所蔵「字源」は、大正13年 15版
- 現在300版ほど

もっと簡野道明を知りたい

- どんな資料があるのか？
- 先行研究は？

簡野道明の文献

- 村山吉廣著『漢学者はいかに生きたか』(大修館 1999)「簡野道明」26頁
- 『虚舟追想録』(昭和13年 非売品)、および弟子の佐藤文四郎の手による「虚舟先生小伝 附年譜」
- 直接、ご子孫に取材

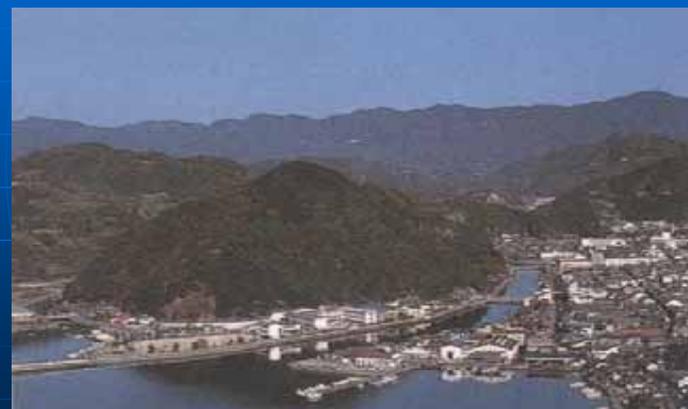
伊達藩の出身

- 陸前本吉の簡野浜(現在の宮城県本吉町歌津管の浜)の出身。
- 伊達政宗の長男秀宗が、宇和島十萬石に分封されるのに従う。
- 秀宗の次子、宗純が宇和島から伊予吉田へ分家。その時、次子義則も宇和島の簡野家から別家し、吉田に移る。
- この義則が吉田藩簡野家の祖。その後、十数代めが吟右衛門、すなわち道明の祖父。

道明、吉田へ転居

- 明治2(1869)年、道明数え五歳。廃藩置県により、両親・祖父母とともに吉田へ引っ越す。
- 新しい住まいは、吉田城下の御厩屋奥の長屋。ここに旧藩士が軒を並べて住んでいた。
- 現在、吉田高校の敷地内
- 御殿風の建物が建つ。 吉田陣屋跡

伊予吉田藩(宇和島市吉田町)



吉田藩陣屋敷 じつは？



- 宇和島市立
簡野道明記念
吉田町図書館
- 昭和61年竣工
- 簡野家の遺族か
らの寄付による

仙台の伊達家の建物？



- じつは京都・一条城を
模したもの。
- 図書館らしくないが
……

どう見ても図書館には...



やっぱり図書館だ！



- 寄付したのは、
簡野信衛(の
ぶえ)夫人
・蔵書は3階
書庫に

簡野道明夫人・信衛氏



松山藩御典医
今井鑾(らん)
の長女
・蒲田女子高校
初代理事長

道明の勉学

- 6・7歳の頃、父義任から句読や習字を授けらる。
- 先君子(父義任のこと)之を戒めて曰はく、凡そ物に本末あり、事に先後あり。抑も四子六経は義理の府にして、文章の宗なり。学ぶ者、先づ沈潜講究せざるべからず。

父の方針 字義を大切に

- 且つ曰はく、経学を講究せんには、先づ字義訓詁に通ぜざるべからずと。
- 爾來、精を小学訓詁に専らにし、爾雅・説文に関する書は、殆ど涉獵せざるなし。

父の訓誡

- 狩谷掖斎の歌
- 「文字の関まだ越えやらぬ旅人は道の奥をばいかで知るべき」

(詠説文歌)を朗誦

字典編集の“起点”

- 字義を大切にす道明の姿勢 父義任の庭訓。
- 『字源』 諸橋轍次『大漢和辞典』が誕生するまで、漢和辞典の権威に。
- 簡野高道校長室にあるもの 読売新聞出版局校閲課から贈られた『字源』(昭和25年版)。

道明少年、小学校へ

- 明治5(1872)年、道明(8歳)小学校へ入学。小学校は藩の旧御殿(戸平門長屋)をそのまま使用。
- 「唐詩選」「三体詩」等を耽読。
- 11・12歳の道明が中心となり、頼山陽「日本外史」の輪読会を開く。

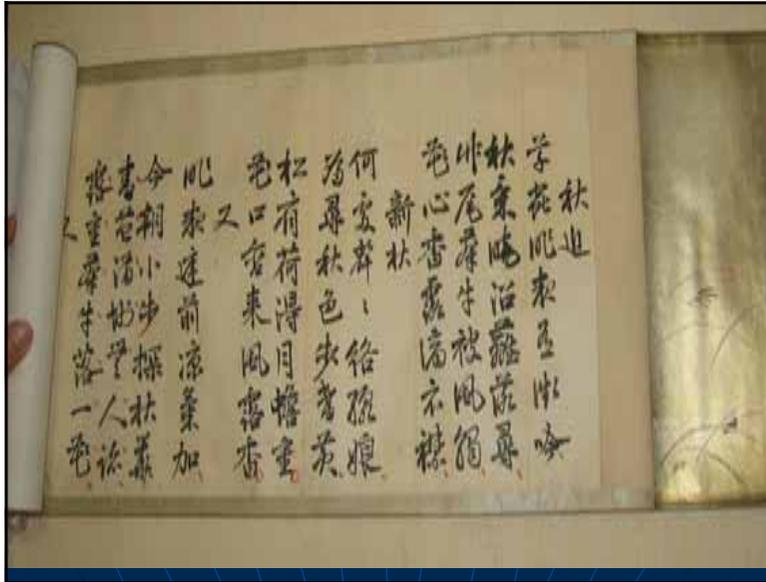
兵藤文斎に学ぶ

- 兵藤文斎とは.....。
- 吉田藩勘定奉行取締、学館訓導などを歴任、詩文や書に長じていた。
- 吉田藩の碩学。
- 清「東瀛詩選」にも選録さる詩人。
- 兵藤文斎百韻・秋巻(宇和島市教育委員会・国安の郷蔵)。

文斎百韻・秋巻



- 吉田町
国安の郷
- 漢詩の名手
- 道明の尊敬した師
(14歳頃)



永遠の白髭時代

- 明治13年、道明16歳。
- 愛媛県東宇和郡白髭小学校教員(代用)に。
- その小学校はどこに？
- 彼の住んだ茅屋はどこに？

息女よし氏(理事長)の回顧

- 其学校は吉田の町からは数里も隔つた山間に御座いましたので、父上は御両親の許を離れて、只一人、小さい茅屋を借りて其処に住んで居られました。

同 回顧 2

- 前には 清い清い谷川が潺湲として流れて居り、僻地である丈に自然に恵まれた風光明媚な地で御座いました。毎朝、未明に起き出て泉流を掬んで顔を洗ひ、それから御自分で

息女よし氏の回顧・3

- 御飯をお炊きになり、其の薪の火光で読書をなさつたさうで御座います。父上も其当時が大層お懐しいらしくて、時々話してお聞かせ下さいました。
(「亡き父上を思ひて」)

道明が顔を洗った小川



- 荒間地(あらまち)川
- 明治以来の堰
- 炊事もできた

稻生川 (いのうがわ) の流れ



「雪案螢窓」

- 薪の火光で読書をなさつたさうで御座います。
- 明・張瑞図「日記故事」より
- 「雪案螢窓」を「新編漢文読本」(明治44)に収録。
- 晋・孫康の「雪に映ず」、晋・車胤の「螢を聚む」の故事(「蒙求」)も。

「落合の国語、簡野の漢文」

- 道明の教科書の流れ・明治書院
- 「中等漢文読本」 明治33
- 「改修 新編漢文読本」 大正11
- 「新修漢文」全4冊 昭和12
- 8割を占める

学校跡と茅屋跡



現在の白髭集会所(旧学校)



■ 「読書之樂」

教科書に見る
道明のことば

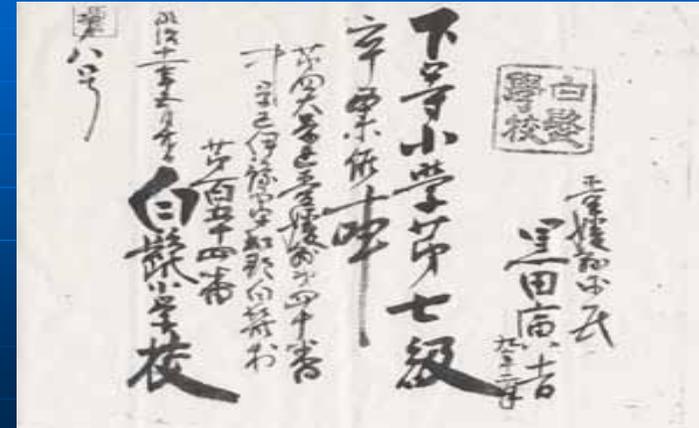
塩谷宕陰

酒井忠勝好読書、
毎夕使儒臣侍講、
限以乙夜。雖公事
繁劇、未嘗廢懈。每
語人曰、坐而知數
万里之外、數千里
之上。何樂加焉。」

「新修漢文」の力

- 「新修漢文」でこの教材を読んだ数は？
- これは「全国の旧制中学の8割を占めた」(「桂川遺響 出版人三樹一平の足跡」明治書院ホールディング 非売品 06)による。
- 明治書院110周年記念

白髭小学校卒業証書を発見



羅漢穴(愛媛最大の鍾乳洞)の探検

- 明治14年麦秋の頃(17歳)



「羅漢穴入口」の道しるべ



しかし...

- 台風の直後で、湧き水・倒木・土砂崩れで、たどり着けず

断念！

羅漢穴



道明の探勝癖

- 「今は麦が熟して居り刈取時期です。穴に入ると暴風が吹きます」(学務委員)
- 翌朝、帰途についた。それまで晴れていたのに突然天がかき曇り、風雨が猛然と襲いかかってきた。傘もさせず、まったく濡れネズミ同然となって帰宅。
- 農民の苦情に閉口

羅漢穴の上は、四国カルスト



羅漢穴の上の雄大な風景



四国山脈の風を受けて



「勉強家だとは失敬千万」

- 道明の従兄、赤松三代吉の言葉
「君は本当に勉強家だね」
- 「日本外史」「十八史略」などを輪読
- 道明「勉はつとむる、強はしゆると読む。僕は決して強ゆるものではない。只学を楽しむものである。」

吉田町の枇杷(道明の旧居付近)

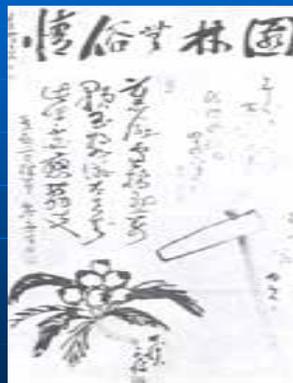


たわわに実った枇杷



■ 吉田町は枇杷の木が多い

「園林に俗情無し」



- 題字：徳富蘇峰
- 短歌：尾上柴舟
- 漢詩：簡野道明
- 右絵：下村為山
- 左絵：阪井久良伎

道明の漢詩

- 癸酉黄楸節
- 薰風盧橘熟
- 万顆玉漿滋
- 太真知此味
- 不必恋荔枝

(昭和8年筆)

簡野道明の詩「無題」

園林果熟鳥先知
暮暮朝朝竹外窺
睡起先生無一事
摘將盧橘付黃兒

(少年期の作)



後年の道明、毎年**枇杷の会**を

- 蒲田の邸宅には枇杷の木だけで数百本もあって、毎年のように実をたわわにつけていたという。

(「近代漢文教育のパイオニア」簡野道明の愛媛時代 愛媛新聞メディアセンター 07.3 刊行)

同・続き

- 園内に来客を案内して、ひょいと枇杷の実をもちで「甘いよ」といってそのまま丸かじりし、客人にも差し出すのを好んだ。

枇杷
(李時珍「本草綱目」)

■ 枇杷高丈余、肥枝長葉、大如驢耳。背有黃毛。四時不凋。盛冬開白花、春實。其子簇結有毛。四月熟。大者如鷄子。小者如龍眼。皮肉甚薄。核甚大如茅栗。色白者為上、黃者次之。

(「高等女子漢文讀本」卷二)

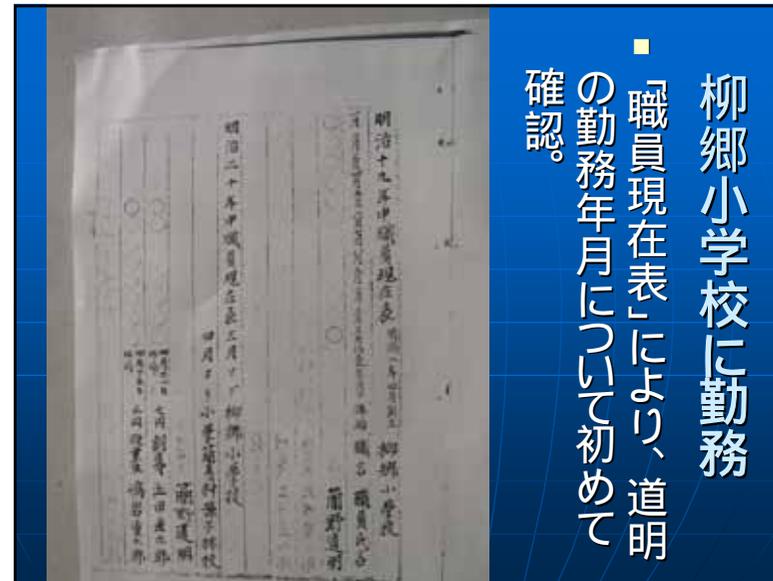
愛媛県師範学校入学

- ・ 級友も兜をめぐ高い学力
- ・ 抜群の記憶力 「頭に入れば、もう用はない」

師範学校を卒業し、教員に

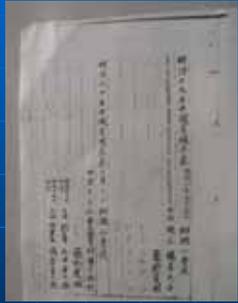
- 明治17年
- 東宇和郡 柳郷りゅうこう小学校訓導となる。
- のち同郡 卯之町、宇摩郡三島、喜多郡大洲、東宇和郡 予子林よこはやし等の諸校に歴任す。其の間約7年。
- (弟子・佐藤文四郎の「年譜」より)

道明の足跡マップ



- 「職員現在表」により、道明の勤務年月について初めて確認。
- 柳郷小学校に勤務

柳郷小学校勤務を再確認



- 林光雄氏(大洲市文化財保護審議員)との共同調査
- 予子林自治センターの倉庫で、(予子林)「学校沿革史」第二輯「職員之部(明治二十三年十月)を発見

柳郷のある大洲市肱川町



「学校」(貝原益軒)

■ 天下不可一日而無義理。無義理則人道廢矣。是以国家不可一日而無学校。无学校則義理之教不興。人倫之道不明。故曰「飽食暖衣逸居無教、則近禽獸」

(初等漢文読本「卷三」
明治三二年)

■ 簡野道明(23歳)

開明学校の教員へ

明治二十年九月、卯之町の高等小学校で一ヶ月訓導をつとめる

卯之町の場所は？



西予市卯之町の開明学校(重文)



開明学校(明治15年建築)



- 1882年、白壁にアーチ型の窓と舶来ガラスを採用
- 西日本最古の校舎
- 貴重な資料約6千点が収蔵
- 平成9 国の重文

開明学校・遠景1

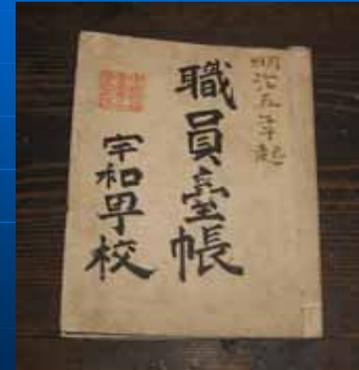


- 学級数4、教師数2～4
- 月給、2～3円と薄給。
- 児童の意識も旧寺子屋同然だった。

開明学校・遠景2



「明治五年起 職員台帳」を発見



- 佐藤文四郎「年譜」明治17年の条
- 以後、約7年間、卯之町などの諸校に勤務とのみあり
- その勤務年月は不明



- 六十二
- 北宇和郡吉田土族
- 明治廿年9月赴任
訓導 簡野道明
- 全年全月解任
- 勤務年間 一ヶ月

道明の出勤簿も発見



- 教員の定着度は低かった。
- 道明の勤務期間一ヶ月もこれを反映しているか

欠勤の多かった道明



- 「明治廿年九月」の欄に「簡野道明」とある
- 九日から十七日まで欠勤、廿三日と廿五日も「全」、つまり欠勤

洋風化の教育に異議

- 体操も唱歌も洋服もすべて外国向だ。之を好む仁は、幾何か軽薄の仁たるを免かれない。
- (坂本楽天「簡野道明君」)

転勤、また転勤、そして...

- 明治23年9月
- 予子林小学校(愛媛県大洲市肱川町)の校長
- 東宇和郡東部地区、最初の尋常小学校
- 終身・読書・作文・習字などの科目

簡野道明はこの2代目校長に

予子林を地図で確認



- (明治25年)
- 七月廿六日簡野道明依願免官二付本日ヨリ校務ノ引継ニ着手、廿七日結了

- (明治23年)
- 九月十五日前訓導上田直太郎帰郷、新任訓導簡野道明着村

- 通算一年十一月勤務
- 教員 大塚豊三郎と「青年夜学会」を立ち上げ、論語 孟子 内書五経等を講義（「横林村誌」）

- 「職員現在表」も再発見
- 出勤状態の確認
- 明治廿三年九月十五日着任
- 明治廿五年七月二十六日退職
- 給料 拾三円(校長の手当)

現在の予子林小学校



- 昭和6年再建
- 県内有数の木造校舎
- 明治時代の校舎をしのばせる

当時の学籍簿を発見



現在、生徒数は六学年全体で計17名。明治23年の統計では、男子67、女子26だった
(『新編肱川町誌』)

氏名	生年	卒年	備考
水沼輝次	明治十年四月二日	明治廿三年四月廿五日	
...

- 水沼輝次
- 生年 明治十年四月二日
- 卒業 明治廿三年四月廿五日
- 横林村予子林簡易小学校一於て第三学年程履修中

教え子・水沼輝次との交流

- この時期のことを最もよく知るのは、予子林小学校での教え子で、道明に心服しその死まで崇敬の念をもって交流のあった水沼輝次(のち大阪の実業家)である。水沼少年はよく新婚家庭を訪れ、時々泊めてもらったという。

(佐藤文四郎「小伝」)

道明の新婚生活

- 「(先生の教え子が)簡野さんが美しい奥さんを迎へられたといふので、夜、覗見をしたと云う昔話を聴かせてくれた」
- 「其の頃の簡野さんの様子を想像して、微笑を禁じ得なかったものである」
(伊藤素軒「哭簡野虚舟先生」)

簡野道明の貴重な八ガキを発見



- 愛媛縣東宇和郡豫子林一亭
- 大塚豊三郎
- 岡田竹一様
- 在神戸 簡野拝
- (明治廿二年一月消印)

簡野道明の夫人とは



- 東京・蒲田の令孫簡野高道先生に取材
- 松山藩の典医今井鑾の娘(氏所有の戸籍謄本で確認)



初代理事長
簡野 信衛

賢夫人・信衛

- この信衛夫人こそ、読書・揮毫・家政学にすぐれ、夫を陰で支え、またよく子らの養育をし、世に賢夫人として称えられた人物。
- 道明の「女子教育」の礎に。

予子林小の校長室



- 筒野道明の掛軸
- 写真など

道明の漢詩・53歳

■ 煙霞泉石有前縁
探勝四方三十年
萍迹天涯猶未遍
春風笑上洞庭船

「丁巳（大正6年）春日、將に禹域に遊ばんとするに、桂川三樹君の來訪す。即ち賦して似しめす」

道明、上京す(明治25年)

- 道明、予子林小学校長を辞職。
- 勉強への志が高まる。
- 上京を決意、苦難の時代へ
- その後、文学社で働きながら独学
- 明治28年、東京高等師範に入学
- 明治30年、東京府師範学校教諭
- 明治35年、東京女子高等師範教授

その後の東京での 道明の活躍は？

これはまたのお楽しみ。

いつかどこかでお会いできる日を。

ご協力頂いた関係者・機関

- 簡野高道(蒲田女子校理事長)
- 愛媛県西予市文化財保護委員
- 同 大洲市文化財保護委員
- 開明学校(国の重要文化財)
- 簡野道明記念吉田町図書館
- 愛媛県宇和島市教育委員会
- 同 大洲市予子林小学校
- 中国・大連図書館(旧満鉄図書館)

名著『字源』の著者・ 簡野道明の若き日 の足跡を訪ねて *end*

- 製作・著作
- 加藤国安